
What A Day

河瀬 シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

What A Day

【Nコード】

N0548A

【作者名】

河瀬 シン

【あらすじ】

今でもアレが現実だったのか自信が無い。霞む視界の向こうに赤い髪の女がいた。どうなったか覚えていない。覚えていないけどこの時一人の人間が死んだのは確かだった。巨大な学園に一人の転校生。その女生徒の転校と同時期に起きた謎の惨殺。化け物同士の餌と縄張りの奪い合い。巻き込まれたのは銀髪の男かそれともその転校生か…。

・プロローグ・

街頭すらない暗い夜道、川を流れる笹の葉の様な動きで影は忍び寄った。

影は笑っている。

当然だ。

これから刹那の時を与えず殺す。と言うのに青年は全く気づいていない。

闇より暗い影の中に更にドス黒い欲望が渦巻く。

もつとも原始的でもつとも純粋な欲望。

エネルギーの摂取。

いくら影といえども生命である。

食事を取らなければ生きてはいけない。

可哀想な事に今日の食事は彼だった。

トスッ

影が青年に突き刺さる。

不思議と血は零れない。ただ彼の血は直接影の中に吸い込まれていった。

ビクンッ ビクンッ

「
」
痙攣する体から何か聞こえた。

口に耳をつけないければ聞こえないほどの小さな声。

踏み潰される直前の蟻よりも薄い命で青年は自分の生を訴えていた。

「
…ほう」

感心したように初めて影は口を開く。

影の声は若い。若いが年月を経た厚みのある声だ。

その人を酔わせてしまいそんな声で影は続けた。

「食事が繁殖になるとはな…くつくつく」

ドブンっ

影が水飴みたいに溶けて闇に消えた。

残されたのは腹に穴の開いた青年だけ。

傍から見れば彼は死体だった。

焼けた鉄のように熱い死体だった。

Day - 1 : 猫と雪色の髪

「どっしょっかな」

ここに男子生徒が一人。

濃い青のブレザーに身を包んだ彼の腕の中にはハッキリ言って汚い猫が一匹。

彼の名前は宝生総思^{たからぎ そうし}。

標準を少し超える長身に少し心とも無い矮躯、その頂点では長い髪で目を隠していた。

総思は自分の眼が嫌いだった。

生れつき赤みの強い瞳も、その瞳が生み出す力も、何もかもが嫌いだった。

それでもどんなに目を隠そうも彼の髪は隠せない。

冬の淡い紫の陽を包み込んだ銀の髪。

総思の名前を聞いたら誰もがその赤い眼ではなくその銀の髪を思い浮かべる。

彼はあくまで銀色なのだ。

「お前も降りれないならこんなところに登るなよな」

「ナァ」

「くそつ、なーないやがつて。なんか恩返しでも出来るのか？
ちなみにお礼はP 2がいいぞ。欲しいんだけど一人暮らして買う金がないんだ」

「ナァ」

「はぁ、悪い。頼んだ俺が悪かった」

もちろん猫が答えるわけが無い。

誰かに見られたらちよつちアレな人に間違えられそうだ。

「しっかしまあアレだ。お前らはいいいよ。何考えてるか全然わかんねえもんな」

「ナァ」

「そうそう、人間と違ってお前ら分り難いよ」

総思はニコニコしながら猫を抱き上げた。

「フギヤー!!」

突然腕の中で猫が暴れ始める。

全身の毛をハリネズミみたいに逆立てられてやっとな総思は気がついた。

「あはは、ごめんごめん。脅かしちゃったな」

やっぱり総思は嬉しそうに猫を腕に抱きかかえた。

まあ猫が怯えるのも無理なかった。

二人がいるのは垂直の壁なんだから。

六階建ての校舎を三棟も持つマンモス高校『星屑学園』

その中でもさらに高い総合情報センター。

15階もあるこのビルの壁、たった5cmの溝に足を掛けて彼は張り付いてた。

キンコンカンコン

何万回と聞いてきた審判者の鐘が鳴り響く。

「お、そろそろみんな登校してくるし行くか？」

そういつて総思は僅かな足場に立ち上がった。

「いづくぞー!!」

片手に猫を抱いたまま地面に向かって跳んだ。

ヒュウウウウウウ

「フギヤー!!」

冷たい冬の風を切つてのダイヴ。

一枚二枚三枚…視界の端を流れるみたいに窓ガラスが視界から消えていく。

「ニヤ、ニヤ、ニヤー!!」

「おいこら、暴れるなって うわっ」

飛行機のように安定して落下していた総思のバランスが崩れる。

猫は潰れたトマトみたいな自分を一瞬想像した。

でも幸いコンクリートの地面に猫の死体はない。猫を抱えていた少年の姿もない。
ぶらぶらぶら

地面すれすれの壁にはしかめっ面の総思。
新鮮な血液みたいな紅色をしているのは彼の指。
鍛え上げられた鋼の指がまだ汚れの少ない茶色の壁にめり込んで
体を支えていた。

「ほら、お前もういけ。俺疲れた」
総思は妙に疲れた顔で芋虫みたいに縮こまっていた猫を地面に落
とした。

「ナァ」
ネコは最後に鳴いて逃げていった。
走り去る後姿はどす黒いオーラが見える。
奴は絶対心の中で唾を吐いていた。

「やれやれ」
ストン

総思は壁から指を抜いて着地する。
ニユツと伸びた指と爪はゆっくりり人のモノに戻っていく。
猫にも嫌われるのか…。

総思はその隠れた瞳を下げて微かに苦笑した。
ちらつと覗いた犬歯は磨いだように鋭い。
歯を仕舞いながらぐつと背中を伸ばす。そしてそのままパタンと
後ろに倒れこんだ。

「んゝ、派手に動きすぎたなあ……」
キンキンに冷えた冬の空の下。
いるのは誰もいないタワーの陰。

雪色の銀の髪を靡かせた青年はそのまま懐かしい夢を見た……。

・
・
・

総思は今でも思う。

コレは本当に現実に起きたのか？と。

ふわふわの雲の中を漂ってるみたいな浮遊感の中で総思の霞む視界の向こうに一人の女性。

当時の総思より少しお姉さんらしい彼女は白くて長い手足と赤い髪、それに冬の匂いが印象的だった。

（美人だなあ）

霞んでるのに美人が分かるのかって？

そんなのは感覚でいい。

彼の夢だ。彼が好きに脚色したって誰も文句を言えない。

その美人が突然雲の向こうから手を伸ばした。

ちよんつと頬に指先が触れてそのままつつと首に下がってくる。ゾクゾクする。

総思が変なことを期待した訳じゃない。

動物としての体がナニかを察して反応した結果だった。

ぷつつ

起きるはず無い事は呆気ないほど簡単に起きた。

白い白い指が総思の首にめり込む。

彼女の表情は霞んで見えないまま。

それでも彼女が何の苦勞もしてないことくらい総思は読かった（わかった）。

何で分かるのかって？

別に今度もそんな気がしたってわけじゃなかった。

何を隠そう総思は人の心が読める。

なんとなくでも読めると言うよりも読かる（わかる）。

感情に合わせて色と形が観えるのだ。

だから総思は彼女が指をめり込ませるのに苦勞してないことくらい当たり前の様に読かった。

ただ彼女が思ってるのは…

『お腹へったよう』

そう、お腹減って……っておい！

もしかして俺食われちゃうの！

ねえ、食われちゃうの？

マジで！？

いーやーだー！

総思はふわふわの中で必死にもがいた。

それこそ納豆の箸に伸びた糸を切るくらい一生懸命もがいた。

ただいつもなら彼の思い通りに動く手足が思うように動かない。

かぶっ

『あっ』

ちゅーちゅー

ツツコミ入れたくなるくらい間抜けな音と共に総思の意識が吸い出されていく。

痛みなんて蚊に刺されたほども感じない。

だからこのまま死ぬなんて考えは総思には浮かばなかった。

目が覚めたらまた学校行って勉強して友達とバカやって、もしかしたらそのうち彼女も出来るかもしれない。

そんな楽しい想像が鶏の産む卵みたいにぽこぽこ浮かんだ。

今の彼には不快感なんて微塵も無い。

有るのは不思議な安堵感と消えかけた意識が見せる楽しい未来だけ。

そして何も感じないまま、宝生総思って人間は死んだ。

Day - 2 : 彼女のテリトリ

ガヤガヤガヤ

虫かごの中の虫みたいに落ち着きの無いクラスメート。

その視線は全て教壇の上の少女に向けられている。

正直彼女は居心地がかなり悪かった。

それはもう耳の中で虫がブンブンいつてるくらいの不快感だった。全ての原因は転校生に訪れる最大の難関、ザ・自己紹介。

何度繰り返し返そうとそう簡単に慣れることの出来ないイベントだ。

全く持って勘弁してほしいよ、人間の生活に溶け込むだけでも大変だって言うのに。

切れかける理性という紐を我慢と言う名のボンドで無理やりくっつけた。

「静かにしろー、お前らが五月蠅いせいで転校生がびっくりしてるだろおが！」

なんのつもりかいつかテレビで見たことあるようなオカツバ頭を掻き揚げながら担任らしい男が叫んでいる。その顔はドラマの主人公よりも脂っこくてクドい、おまけに声まで五割増しだ。

たぶんこの男が一番五月蠅いと思っていたのは彼女だけじゃないだろう。

「梧桐せんせー、早く紹介してよ」

調子の良さそうな男子生徒が前に乗り出しながら声をあげた。

まったくだと教壇の彼女も心の中で頭をがっくんがっくんさせている。

そういえば担任は梧桐（うすく）というんだった。

「そだな、じゃあ六花くん、自己紹介を頼む」

「はい」

ほんの少しだけ時間が止まる。

教室全体が息を呑んだみたいだった。

「わたようりつか済陽りつか六花です。ドイツから来ました。まだ日本のことはまだよく分かりませんがよろしく願います」

当たり障りない自己紹介。今まで何度と無く六花が繰り返してきた物と一字一句変わらない。

「と、言うことだ。済陽は親御さんとはなれて単身ドイツから日本に来たらしい。何かと助けてやってくれ。」

そういえば俺も昔は一人暮らししたなあ。ボロボロのアパートで毎日ご飯ですよをパンに塗って飢えをしのいだっけなあ。うん、済陽の心配は分るぞ、寂しいんだよなあ、心細いんだよなあ。大丈夫だ！先生がついてる！！何かあったら遠慮なく俺の胸に飛び込んでこーい！！」

地球の温暖化を手助けするような暑苦しさや熱帯低気圧のごとき湿度で恥ずかしげもなく寒いセリフを叫んでる。

うん、姿を見た瞬間から気づいてたけど梧桐はやっぱりドラマに影響されて教師になったクチらしい。そのうち絶対土手で夕日に向かってダッシュだーとかいいだすわね。

六花が一人でうんうん頷いてる間も梧桐の講釈は終わっていきなかつた。

「先生、私はどこに座ればいいですか？」

放っておくと教室がサウナになりそうだったから六花は話を止めた。

「ん？ああそうか、窓側の一番後ろに座ってくれ」

まさに転校生！っていう席だ。

他の場所より周りの目を気にしなくていい分六花は気に入った。

あれ？

隣の席も無人。

鞆だけがぼつんと揺れている。

六花は気になったもののそのまま無視して自分の席に着いた。自分から必要以上に他人に関心を持つ事は、六花にとって鼻くそより価値がなかったのだ。

「お、そうだそうだ。大事なことを忘れるところだった」

梧桐の顔がぐっと引き締まる。

なんだ、そういう顔も出来るんじゃない。

完全に梧桐を賞めきっていた六花は少しだけ見直した。

「昨日住宅地の方で通り魔が現れた。で、しばらくは放課後学校に残るのは禁止だ。当然部活もない。例外は認めないからな、以上」

強く言い切る梧桐の口調に教室の空気が固まる。

普段の梧桐からは想像出来ない姿なのだろう。

通り魔。

およそ人が日常生活で出会う類の中では強いレベルの脅威。

梧桐の様子からもそれだけ事態は深刻という事。

それでも勇気ある男子生徒が抗議の声を上げた。

「ちよつと先生！県大会が近いんですよ。それをいきなり大した説明も無しで部活禁止ですか？」

梧桐は少しも顔を崩さない。

それどころか更に厳しい口調で

「俺は例外は認めないと言った」

そう告げるだけ。

生徒も引き下がらない。

「せめてまともな説明をしてください！！」

流れ始めた空気が再び固まる。

ただ一人、六花だけが関心なさそうに窓の外を眺めていた。彼女にとっては教室の騒ぎより、視線の先にいる見知らぬ銀髪の生徒の方が余程珍しくて愛でる価値があるのだ。

「聞くならちゃんと心に留めろよ」

厳しい顔つきを少しだけ緩めて話し始めた。

「昨日現れた通り魔の被害者は、身体の至る所がドロドロに溶け、体中の血を抜かれていたそうだ」

どよめき立つ教室。それを気にした様子もなく梧桐は続ける。

「何より身体からは科学薬品の反応もなく、現場には一滴の血も落ちていなかったらしい。つまりどこでどう殺されたのか全くわからない状態だ。そして最も重要なことは――」

そこまで聞いて六花は視線を戻した。

梧桐の言葉に引っ掛かるところがある。

「被害者はこの学校の生徒だ」

それだけ言うと静かに梧桐は教室を出て行く。
残された教室は気温が下がった様に冷たい。

ガリッ

六花は奥歯が欠けそうな勢いで噛み締めた。

…害虫がいる

梧桐の話は六花にとってそう思わせるに十分だった。

・オンザサブジェクト・・・三色の異常

時は夕刻。

場所は公園。

射す光は朱で芝生や樹、ベンチやアスファルトに至る全てを染め上げていた。

人は誰もいない。

在るのは対峙する二つ。

紅い異形と、黒の影。

そのシルエットはとても人間には似ても似つかない。

紅い異形は伝承に残る吸血鬼宜しく、牙と爪を鋭く伸ばし空を羽ばたいている。

黒い影は四肢をゲル状に溶かし、どう型を保っているのかすら分らない。

向い合う二対の眼。

今、黒の影は焦っていた。

自分から仕掛けたものの影は自分以外の異形と拳を交えたことが無かったのだ。

彼は人間なら秒とかからず骨にすることが出来るというのに…。それが既にもう半刻経とうとしている。

事実、彼は崩れていく身体を維持することすら辛くなっていた。

ドブッ

突如黒い影が自ら身体を崩す。

瞬間！黒い雫が地面に沈んだ。

今度は紅い異形が焦る番だった。

何が起きるか黒い影にしか分らない。

高く高く舞い上がる紅い異形。

又ニヨンッ

しかし僅かに黒い影の方が早い。

樹の枝から染み出した雫は背後から翼ごと赤い異形を包み込んだ。

どうなるかは明白だった。

赤い異形は今から食われる。

事実、数秒とない落下の間に黒い影によって紅い異形の体は被爆したみたいに溶け出していた。

しかしその確信は乱入者によって掻き消される。

黒い影を切り裂き紅い異形を奪う銀の乱入者。

彼はそのまま止まることなく街灯の上に降り立った。

銀の髪、隆起した鮮血の筋肉の束を有する彼は…人間だった。

いや、もしかしたら彼も人間ではないかもしれない。

それでもまだ彼は人間とほとんど変わらない姿をしている。

だからこそ彼は異常だ。

例えば人間だとしても、異常だらけの中にいる唯一の正常は最も異常だった。

いつの間にか公園は三つの異常に支配されていた。

Day - 3 : 追跡者

公園が異常に支配されるほんの数時間前の事。
済陽六花は一人校舎の中を歩いていた。

六花は壁越しに聞こえる喧騒を無視し、注意深く回りに気を張り歩く。

目線は前を向きつつ意識だけがキョロキョロとあらゆる角度に向けられていた。

その様子はどこか爬虫類の動きを思わせる。

「
今彼女の機嫌はすこぶる悪かった。

水面に薄い氷が張っているだけの様な緊張感と共に、一度割れてしまえば一気にに噴出す憤怒。

これも梧桐が『昨日現れた通り魔の被害者は、身体の至る所がドロドロに溶け、体中の血を抜かれていたそうだ』と言ってから。
通り魔。

六花はその人物には心当たりがあつた。

名前を？ドロップス？

一つ、他人の身体をヘドロの様に溶かす。

一つ、人間のの血液を好むグルメ。

一つ、様々な土地を渡り歩いて食事を続ける放浪者。

彼女の同類の中ではもっとも有名な化け物。

それが先ほどから後ろを着いて来る者の正体……

「いい加減出てきたら？」

不意に誰もいない廊下に呼びかける。

返事はない。

六花の規則正しい呼吸音だけが廊下に響いている。

「名前通りねちっこくて気持ち悪いわね……！」

カツッ

「えっ？」

静かに一人の男子生徒が姿を現した。

黒ぶちの眼鏡にきちんとした身なりは優等生という形容が良く似合う。

ただ、それは六花の想像していた人物ではなかった。

「済陽さん？」

ビクウ！？

名前を呼ばれて身構える。飛んでいた意識を最短距離で向ける。

やはり彼は六花をつけていた様だ。

「どうしました済陽さん？僕は先生に頼まれてHR中に学校を案内しに来たんですけど……」

「え？あれ？」

先生に頼まれた……？

え、えっと……確か今朝通り魔の話聞いて、心当たりがあつて、まず身近な校舎の中見回ってて、そしたら誰かついてきて……。

……何もオカシイ事ないじゃない。

当たり前だ

良く考えれば誰でもわかる。何で学校の中に通り魔が現れる？

そもそもあいつはノコノコ昼間の学校に現れるほど馬鹿じゃない。新しい土地に来たばかりで神経過敏になっていただけだ。

「あはは、ごめんごめん、何か勘違いしてたみたい」

「そうですか、いきなり嫌われたかと思って心配しましたよ。じゃあ一緒に見て回りましょう」

少しだけ硬い口調が感に触ったけれど六花は素直に頷いた。

このまま妙に気を張っても何もいいことがない。

妙に勘繰られては彼女にしても元も子もなかった。

長い……。

校舎の中には誰もいなくなっていた。

もう30分はこうして歩き回った。

彼に声をかけられてから六花は殆ど言葉を発してない。

そんな事を気にする風もなく涼弥は話しかけ続けている。

「僕はこの学校が好きなんです。この学校だけじゃなくこの街もこの街に住む全ての人間。言葉どおり全てのモノが好きなんです」

窓を遠くにある筈の街を覗く。

「済陽さんもこの街を好きになってもらえると思います」

だからなんなの？

少しだけ奥歯を噛みながらもやはり六花は返事をしなかった。

こいつの全てが感に触る。全てがウソ臭い。

六花の機嫌はますます悪くなっていた。

良く言えば礼儀正しい丁寧な、正直言えば堅苦しくて迷惑でしかない案内。

その間少し見ただけで彼が嫌いになった。

気色悪い。

それが六花の涼弥に対する評価だった。

「はい、ここが音楽室です。これで主だったところは粗方回りしましたね。…ついでだから最後にもう一箇所回りましょうか？」

不意に涼弥はそんな事を言った。

気分が悪い。

気持ち悪い。なのに

「……………いいよ」

口は勝手にそんなことを言った。

六花は自分でも納得できる理由のないまま、顔を見せず前を歩く

涼弥の後ろを着いていく。

カツカツカツ

…………… カツカツカツ

二人で歪な平行線を引く。

真っ直ぐだったたり曲がったり、時には登ったり。

廊下に響く音は二人の足音だけだった。

ガチャッ！！

涼弥が手に持った鍵で馬鹿でかい南京錠を開けた。
大げさな音だ。

キィ

Day - 3 : 別世界への扉

キィ

案内者　小泉涼弥はその扉を開けた。

ゆつくりと漏れる光。

血！？

真っ赤だった。

真っ赤な紅い海があった。

涼弥は開けた扉の向こうには、夕日を受け止めオレンジに染め上げられた屋上があった。

「……………血でいっぱいみたいでしょう？」

涼弥の言葉に心臓が跳ね上がる。

ドツドツドツドツ

鼓動が激しい？

何でもない。

血という言葉に反応しただけだ。

この光景を見れば誰だってそう思う。

競り上がって来た言葉を必死に腹の底に押し込む。

涼弥はいつの間にか屋上の真ん中あたりまで歩いてた。

「この中になら何体死体があってもオカシくないですね？」

ドツドツドツドツドツドツドツ

どんどんどんどん鼓動が大きくなって…。

五月蠅い！？

夕日を背にした涼弥の身体はまるで『黒い陰』。

微動だにしない身体とは正反対に涼弥の右手がもごもごとガムを噛むみたいに動いている。

なに？

ズルリ…と涼弥の右手は零れた。

ごろん

零れ落ちた自分を涼弥は蹴ってこっちに渡す。

勝手に眼がソレを追いかける。

手だと思ったソレは丸かった。

制服だと思ったソレは毛髪だった。

見たときから分っていた。

人間の頭。

「ほら！やっぱり死体があつただろ！？」

表情が見えないまま涼弥は両手を広げてアピールする。

その姿に先程までの毅然とした態度は無い。

まるで子供が親に褒めてくれと催促しているようだ。

「で、だから何？」

六花は心底安心した。

別に私何も勘違いしてないじゃない。

ただこのキモイ奴が紛らわしいことしてくれただけじゃなの！！

「やっぱり貴方ねちっこくて気持ち悪いわよ」

ジャツ！！

「黙りなよ……」

何かが頬を掠めた。

夕日が雲で隠れる。

涼弥の顔に笑顔は無い。

笑顔どころか顔自体が溶けて残っていない。

「僕はこの街が好きなんだよ。この街に住んでる人間もさ」

もう無くなつてしまった口で涼弥は演説する。

「もちろんコイツもさ」

パシン！！

激しい破裂音と共に足元の頭蓋は破裂した。

少しだけ綺麗だな、なんて事思つて急いで消した。

「みんなみんな俺のものなんだぜ、何で嫌いになれるんだ？みんな愛してるよ……」

テンションが上がってきた涼弥に呼応するように涼弥の足元の影

は立ち上がった。その先からはテラテラ光る紅い液体が零れている。
先程頬を掠めたものだろう。

六花はそつと自分の首に手を這わせてみた。鈍い痛みが奔る。彼の放った影は彼女の首の薄皮を溶かしていた。

「……なんのつもり」

「わっかんねえかなあ。だあーかあーらあー、アンタも愛してるって事だよ。しかもアンタは特別だ。アンタも俺と同類なんだろう？ アンタの身体は他のシヨンベン臭せえバカ共と違って美味そうな血の匂いがプンプンしてんぞ」

ボコンッ…ボコボコボコン

気泡が内から弾けてトロトロとろける。

いつの間にか陰から影になっていた。

害虫は彼で決定ね。

だったらやる事なんて決まってるじゃない。

「害虫は駆除される運命よ!!」

バツ!!

ドブン!!

二人の姿が屋上から消えた。

空には羽ばたく人影、壁には蠢く黒い雫がいた。

Day - 4 : 必然はその足から

「くわあゝ」

眼をトロけさせた青年が一人。

寒気を感じて頭が起きるよう指示を出す。

やっべ、めちゃくちゃ身体冷えた。

このまんまじゃ風邪ひちゃうよ。

総思は日が沈み始めてやっと眼を覚ました。

仮にもこの話の主役は出番が極端に少なく、今まで誰も起こしてくれなかった。

…ちよつと泣きそう。

ズルズル鼻を嚙りながら教室に向かう。

何故だか学校に人のいる気配がない。

こええなゝ。

いくら夕方と言っても人のいない校舎はどこか薄ら寒いものがある。

ひたひただらしの無い足音だけが妙に響く。

子供が夜中にトイレに行く時に根拠のない恐怖を感じるように、

何かに胸を圧迫された。

寒い。

いや、寒いというより熱が足りない。

根本的に生命力が欠如した寒さ。

悪寒に近い。

少しでも暖かい所へと足が勝手に進む。

階段…：屋上か。

一段登る。

音？

階段の一番上についた扉の向こうから間接的に何か聞こえた。
登らないほうがいい…：よな？

そう思う頭とは関係なく足は勝手に一段一段踏みしめていく。

ギヤリギヤリギヤリイイ

今度はハッキリと聞こえた。

硬い何かを無理やり引き剥がすような音。

工事現場でもおおよそ聞けそうにない異音。

手がノブに伸びる。

ズドンッ！！

ドアから大きな衝撃が伝わった。

ヤバイ！！

回すな！！

ノブが回る。

カチャ

扉は難なく開いた。

Day - 5 : 研ぎ澄まされた感情

目の前の光景に絶句した。

血のように赤い空の下、見たこと無い化け物が戦っていた。戦っていたと言うよりも殺し合っていた。

二匹の感情が無理やり流れ込んでくる。

？殺す？

他の感情は一切無い。

無駄なく研ぎ澄まされた感情は相手を殺すことだけに向けられている。

何より、化け物が殺しあっている事ではなく胸を圧迫し続ける事があった。

「溶けるおおお!!」

黒いヘドロみたいな奴が上から覆いかぶさる様に降り注ぐ。

(…下からだ)

黒い奴は赤い方に届く前にドーナツ状に広がり地面に溶け込んだ。

そして間髪いれずに槍の様に足元から貫く。

「ちっ」

身を捻って赤はかわす。

掠った腕からはちゃんと赤い血が流れていた。

…やっぱり。

その後も何度も続く攻防。

その全てが手に取る様に分かる。

もちろん化け物だから見たことも無い動きをする。

それでも殆ど見えたとおりになる。

研ぎ澄まされた二人の感情。

強烈な意思は二人の感情を殺意へと変え、行動に移す前に一足先に相手を殺しに掛かっていた。
それら全てが見える。

先送りされた未来に追いつく現実。
そんな不思議な現象が総思を襲う。

ジャキーン！！

激しい交錯音のあと赤と黒ははじき飛んだ。

それも束の間。校庭に着地した二匹は止まることなくまた衝突した。
マジ…かよ。

夢か現か？無意識に右手に力を込める。

朱に染まる腕はビキビキと音を立てながら鋭い刃の腕と化す。

赤と同じ腕。

つまり現実。

「はあ…」

人生で一番重たいため息をついた。

出てくるのはあらゆる後悔。

ここに来た事も、扉を開けたことも、校舎に戻ったことも、寝過ごしたことも。

全部に対して後悔。

それを全部ため息にして吐き出す。

胸の奥で何かにそつと背中を押された。

「止まらない」

駆け出す足。

無言で化け物を追いかけた。

怖さなんて少しも無い。

こんな感動に恐怖なんて全部吹っ飛んだ。

俺が何者か分かる。

こんな素晴らしい事は無かった。

D a y - 5 : 研ぎ澄まされた感情（後書き）

ちよつと書くことにめげそうです。

感想や駄目だしあつたらくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0548a/>

What A Day

2010年12月13日21時27分発行